

話題を戦場に戻さん。

ライト部隊の諸艦は新規のSG式レーダーを装備せるもその十全なる活用に熟せず、躊躇して魚雷発射の好機も逸し、たゞ徒らに我が先行艦「高波」への集中射撃に意を注ぐのみ。而してこの時、我が魚雷群の殺到するを受けて大損害を蒙れり。その詳細は諸書に據り多少の相違はあるも綜合して述べれば以下の如し。

旗艦たる重巡「ミネアポリス」は艦首離断、艦内各處に火災を生じ、續く「ニューオルリーonz」もほゞ同様、三番艦「ペンサコラ」は後部機械室に浸水し、更に火災に依り主砲弾頻りに誘爆して危機一髪の状態となれるもダメージ・コントロールの甲斐ありて辛うじて沈没を免る。是に反し殿艦「ノーザンプトン」は魚雷二本を受けて全艦火焰に包まれ、その後遂に覆没するに至れり。然も是等四重巡の掩護の爲、驅逐艦四隻を割けるを以て、戦場に残れるは次席指揮官マーロン・ティズデル少將の坐乗せる輕巡「ホノルル」と驅逐二のみの慘状を呈す。

我が方は驅逐艦「高波」一隻を犠牲として喪ひたるのみにて他の七隻は微傷だに負はずしてその儘歸途に就く。猶「高波」は戦死及び行方不明二一を出せるも生存者は近傍に在りし「親潮」、「黒潮」の二艦に救助せられたり。

壓倒的優勢なる敵に不意を打たれたるも狼狽する事無く、敢然逆襲に出でし田中少將の勇斷、他に比するもの莫し。米國側嘆稱して曰く「テナシアス・タナカ」(不撓不屈の田中)と。

たゞかゝる大戦果は同少將一人の勇膽に依るのみに非ず、部下海兵の高練度恰も『源平盛衰記』に見る那須與一の妙技を想はするものなる事も與あつかつて力あるは云ふ迄も無し。更に九三式酸素魚雷の高性能も附記せざる可からず。

斯くして世界戦史に燦たる偉業は卓立せられたり。

實にガ島周邊の戦ひの掉尾を飾る大捷にして、附近「鐵底水道(アイアン・ボトム・サウンド)」の海底に眠れる多數護國之英靈への獻供とも爲し得可し。